九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[025]九州大学総合研究博物館ニュース

https://doi.org/10.15017/1657550

出版情報：九州大学総合研究博物館ニュース. 25, pp.1-8, 2016-03-31. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：

The Kyushu University Museum NEWS
No.25 九州大学総合研究博物館ニュース

理学部の移転が無事に終了しました。

平成27年10月の後期開講に向けて、理学部の新キャンパスへの移転が行われました。これまでこの移転を前提に、多くの標本整理・データベース化に計画的に取り組んできた結果、無事に標本移転を完了できました。この移転では、工学部移転の際には不十分であった歴史的什器収集も同時に行い、多種多様なものを収集することができました。

総合研究博物館第7代館長 **吉田 茂二郎**

写真1：公開展示会場。産地直送の恐竜化石の実物が、発掘風景や解説とともに展示された。(奥)巨大な大腿骨、(手前)石膏ジャケット。

I

平成27年度 九州大学総合研究博物館 公開展示

地球–人と自然 恐竜発掘最前線

開催期間：2015年11月13日(金)～11月23日(火) 場所：箱崎キャンパス 旧工学部本館 九州大学総合研究博物館

担当：**前田 晴良** 分析技術開発系・教授

恐竜は多くの人々の心を捉えて止まない太古のロマンに満ちた化石生物です。最近では日本各地から化石が見つかっていますが、海外とくらべ断片的な化石が多いのが難点でした。

ところが今、大型恐竜化石の本格的な発掘調査が、北海道勇払(ゆうふつ)郡むかわ町で、むかわ町立穂別博物館と北海道大学総合博物館によっておこなわれていることをご存知ですか？今回、両機関のご厚意により、発掘したばかりの恐竜化石の実物を産地直送で九州大学総合研究博物館に運び込み、特別に展示しました。同時に、発掘に直接携わったお二人の研究者をお招きして公開講演会を開きました。貴重標本のため期間限定であったにも関わらず、約1,200名の方が来場されました。

《p.2へ続く》

ISSN 2187-865X

催事・展示クローズアップ

《p.1から続く》

発見されたのは体長8mに達する白亜紀末期のハドロサウルス類の植物食恐竜で、特筆すべきことにほぼ全身骨格が揃っています。今回展示したのは、2013年の発掘調査で回収された長さ1.2mの巨大な大腿骨(写真1奥)、石膏ジャケットに包まれたままの化石入りの岩塊(写真1手前)、および同じ地層から産出する大型海棲爬虫類のモササウルス類(写真2)やウミガメの化石などです。

写真2：モササウルス類の骨

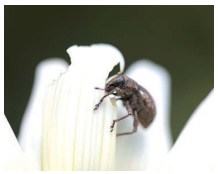
また公開講演会では、発掘責任者である西村智弘博士(穂別博物館)と小林快次(よしつぐ)博士(北海道大学総合博物館)が熱弁をふるわれ、発掘現場の臨場感や今後の研究への期待感が会場全体に伝わりました。講演終了後、各地からつめかけた熱心な少年少女たち(熟年の方も?)が、演者のお二人を質問攻めにしている光景が印象的でした。

写真3：当時の海中の復元図

このように、実物のみが持つ迫力を活かして現在進行中の最先端の研究を一般市民の方々にお伝えするのも大学博物館の重要な使命です。

II そこにあるちいさなせかい －ムシメセン写真展－

期間：2015年10月5日(月)～11月27日(金)
場所：旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室
担当：**丸山 宗利** 開示研究系・助教


カシワクチブトゾウムシ

ムシメセンさん(本名:浅里玲奈さん)はデザインを主なお仕事とされ、同時に昆虫をモチーフとした財布等の小物を作成したり、昆虫の写真撮影もされています。今回は、このムシメセンさんが撮影した昆虫の写真展を行いました。ムシメセンさんの写真の特徴は、とにかく優しいことです。そのペンネームのとおり、とにかく虫の目線で、虫の気持ちになって、撮影していることがよくわかります。技術的な視点から掘り下げると、多くの昆虫写真家は、フラッシュ等の光源を用いて撮影していますが、ムシメセンさんはあくまで自然光で撮影することにこだわっています。そのため、人工的な雰囲気のない、昆虫が野外でいる様子や色彩をそのまま写真に写しだすことに成功しています。またただ写真を並べるだけでは博物館の展示として成り立たない、解説は必要だが、ただの解説ではつまらないということで、今回はムシメセンさんが私に質問し、それに私が答える問答集を解説としました。ムシメセンさんの美しい写真とならんで、この問答集もお客さんに好評だったようです。昆虫は面白くて可愛い。昆虫に新たな視点を与える展示になったと思います。

ホソヒラタアブ

III 九州大学教育・研究の最前線

－第14回P&P研究成果一般公開－

期間：2015年12月1日(火)～12月25日(金)
場所：旧工学部本館3階 301・340・341室
担当：**松本 隆史** 開示研究系・助教

九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト(通称P&P)は、九州大学全学の教育・研究の発展を図るためのプロジェクトで、様々な部局から提案された多様な研究テーマが採択されています。総合研究博物館では、毎年このP&Pの研究成果をご紹介する展示を行っています。今年度は、16のプロジェクトが参加し、九州大学の研究領域の幅広さを伝える展示となりました。

Close-up Event & Exhibition

Ⅳ IFFT(東京国際家具見本市)に参加して

－異彩を放った九大の歴史的什器たち－

期間：2015年11月26日(木)～28日(土)
場所：東京ビックサイト
企画：大川インテリア振興センターとの協同展示
担当：**吉田 茂二郎** 総合研究博物館長

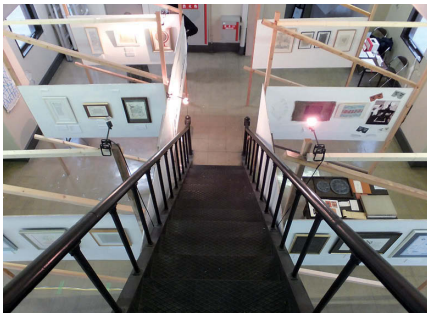
会場風景

九州大学歴史的備品再生プロジェクトと新キャンパスでの農学研究院の建物の木造・木質化の一環として、大学内に残っている歴史的什器の修復保存を大川家具工業会と協同で行っています。今回は、後者の取り組みの一つとして国産の木材で書棚を作り、修復した歴史的什器(執務机と会議用テーブル等)と一緒に木質化した教員室をイメージする展示を行いました。新作の書棚と修復された歴史的什器が見事に調和し、予想以上の反響がありました。他のブースの家具も、最近の本物志向・自然志向を受けて、無垢の木材を利用したものが大半をしめていました。しかし、本学の歴史的什器は約90年前頃(大正中期から昭和初期)に製作・購入されたもので、長い時を経た歴史の重みが他の展示とは全く異なり、さらに本学が目指す歴史の継承と持続可能性の追求が加わることによって、会場の中で異彩を放っているように見えました。

Ⅴ 文字の旅二千年

－手書きアルファベットからデジタルフォントまで－
第6回スタヂオポンテカリグラフィー作品展

期間：2015年12月5日(土)～13日(日)
場所：旧工学部本館3階常設展示室・5階展望室
担当：**初島 さつき** スタヂオポンテ主宰



メイン会場となった展望室の上の階からの眺め

カリグラフィー、活版印刷、写真植字、デジタルフォント－人類が生みだした文字媒体の歴史を俯瞰できる展覧会をいつか開催したい…天神にカリグラフィースタヂオを開いて13年目の去年、長年心の中で温めてきた内容の展覧会を由緒ある九州大学旧工学部本館で開催することができ、大変感謝しています。文字通り、ローマン・アルファベットの歴史を紀元1世紀から21世紀まで、二千年が俯瞰できる展覧会で、700名を越す来場者にも大変好評でした。手で1文字1文字書くことに夢中になるワークショップ参加者、写真植字機を初めて目にしたという多くの来場者、デジタルフォントの世界に改めて触れて圧倒されたという声。往年の活字ファンも詰めかけ、トークショー会場も一杯の人で埋まり、見て、聴いて、触れて、文字といういわば陰的存在にスポットライトを当てることができた9日間でした。

文字道の伊藤さんによる写植の実演

Ⅵ 糸島と空港でのサテライト展示

期間：通年(3～4カ月に1回更新)
場所：糸島市(伊都文化会館・志摩歴史資料館
・糸島市役所二丈支所・あごら)・福岡空港(第1ターミナル)
担当：**丸山 宗利** 開示研究系・助教

空港サテライト

現在私が担当しているのは、糸島市の4か所、福岡空港の1か所、計5か所です。糸島市の展示は担当になってから5年ほどが経ちますが、「世界の甲虫」、「福岡県の蝶」などを題材として、これまで昆虫の展示をずっと続けてきました。福岡空港では、魚類や昆虫一般など、いずれも福岡にゆかりのある生物の展示を行っています。私のこだわりは更新のたびに新しいパネルを作成し、できるだけ実物の標本とともに展示することです。数が多いので、ときに更新が滞りがちですが、できる限り続け、見る方の目を楽しませたいと思っています。

志摩歴史資料館のサテライト

Series : Courses Related to the Museum

シリーズ・大学博物館の授業紹介

その5：放送大学

大学博物館への招待

吉田 茂二郎・岩永 省三・前田 晴良・中牟田 義博・中西 哲也・三島 美佐子・丸山 宗利・松本 隆史 九州大学総合研究博物館教員

前田晴良教授による、化石化のメカニズムの講義

吉田茂二郎館長は、館内の歴史的木製什器を見ながら解説

岩永省三教授は、伊都キャンパス内の遺跡を地域の歴史と共に紹介

この特集では、総合研究博物館と関連する様々な授業を紹介しています。今号で取り上げるのは、当館が協力した放送大学の授業です。

放送大学は、放送大学学園法により設置された通信制の大学です。日本全国でおよそ9万人の方が在籍（平成27年度第1学期教養学部・大学院合計）しており、幅広い地域・年齢・職業の方々が、テレビ・ラジオやインターネット配信の授業によって学ばれています。所定のプログラムで学士号・修士号・博士号の学位の取得ができるほか、学位とは関係なく科目ごとの履修もできるようになっています。

通信制の大学ですが、勉強するためのスペースも全国に用意されており、福岡学習センターは九州大学筑紫キャンパス内にあります。また、放送授業に加え、面接授業（スクーリング）が用意されており、学習センターや連携機関で開講される授業を受けることができます。

今年度、放送大学の面接授業「大学博物館への招待」が九州大学旧工学部本館で開講され、約40名の学生が総合研究博物館を訪れ、博物館の教員による授業を受けました。2日間にわたり、朝10：00から夕方16：50まで1日4コマ、計8コマの集中授業をうけ、最後にレポート課題によって成績判定がなされます。

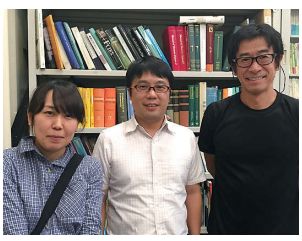
授業の内容は、「博物館で見る地球惑星の姿（中牟田准教授）」「博物館と鉱山（中西准教授）」「化石化のメカニズムを探る（前田教授）」「植物標本と博物館体験（三島准教授）」「農学部と博物館（吉田館長）」「昆虫の多様性解明と博物館標本（丸山助教）」「九大遺跡博物館構想（岩永副館長）」「メディアとミュージアムのデザイン（松本助教）」と、学問分野も多岐にわたり盛り沢山。授業スタイルも、講義形式のものや、グループワークを取り入れた双方向授業、博物館内で各資料を見ながらの解説など、各教員の趣向を凝らしたものとなりました。実際に博物館を体験しながらの授業は好評だったようで、また近い将来、当館の面接授業が放送大学で開講されるかもしれません。（文章：松本）

COLUMN 館員活躍録

「情熱大陸」に出演しました

担当：丸山 宗利 開示研究系・助教

昨年の10月4日放送の「情熱大陸」（毎日放送）に出演しました。「昆虫は人間以上に凄かった…！虫たちの世界に魅せられた昆虫学者・丸山宗利に密着」という副題で、タイの密林で調査する様子やインタビューが放映されました。実質3週間の密着でしたが、使われた部分はごくわずかでした。調査中はひたすらカメラマンの方が後ろについてきていましたが、なにしろジャングルの中を歩くわけですから、大変そうでした。また、毎晩の飲み会で、口下手な私が酔って心情を吐露するところが撮影されてしまいました。このような番組に出演する機会はなかなかないと思いますので、良い経験と思い出になりました。


情熱大陸ディレクターの小林さん（左）とカメラマンの桜田さん（右）

Series : Museum Jobs from A to Z

シリーズ・大学博物館のお仕事紹介

箱崎地区移転準備

第一分館資料の移転作業

米元 史織 開示研究系・助教 専門:人類学　岩永 省三 一次資料研究系・教授 専門:考古学

永らく皆様に親しまれた第一分館が、箱崎地区移転準備のために解体・撤去されることなり、昨年5月に閉館しました。それにともない同館収蔵資料のすべてを移転しなければならなくなりました。とはいっても伊都キャンパス等での博物館建物建設の見込みは未だに立っていませんので、移転先として同じ箱崎地区の旧工学部本館地下1階・旧工学部5号館1階・旧工学部図書館1階が、事務局から割り当てられました。移転すべき資料は、鉱物標本・旧玉泉館資料・考古学資料・歴史的什器資料・歴史的工作機械・人骨資料・動物骨格標本・書籍類など、膨大な量があり、必要な温湿度環境・容積・床強度などはそれぞれ異なります。そこで、昨年の夏から秋にかけて資料ごとの移転先決定、部屋の割り振りを綿密に計画し、運送費用を見積もるとともに、移転のための事前整理作業を進めました。10月下旬から資料の実際の移動を開始し、11月いっぱいで無事終了しました。移転作業は専門業者に依頼しましたが、特に大きく重い歴史的工作機械の移動は圧巻でした。移転完了直後から第一分館は高い塀に囲われ解体が始まりました。当館の歴史の証人、様々な活動の痕跡が消え去ってしまうのは何とも悲しいものです。

資料の移転先は、旧玉泉館資料・考古学資料・歴史的什器資料・展示補助具が旧工学部本館地下1階、歴史的工作機械が旧工学部5号館1階、鉱物標本・人骨資料・動物骨格標本・書籍類が旧工学部図書館1階です。旧工学部本館地下1階・旧工学部5号館1階については、狭隘(きょうあい)な倉庫に押し込んだような状態となり観覧しにくいため、通常の公開はできなくなります。旧工学部図書館1階は、戦前の附属図書館閲覧室で、改装の結果、展示室としての雰囲気が第一分館よりよくなりました。そこで、ここを「第三分館」と命名し、鉱物標本・動物骨格標本を折にふれて公開することにしました。新年度早々にお披露目を計画しておりますので、ぜひともご覧ください。

骨の移動は大変です。

移動を待つ骨たち

機械が無くなった機械工場

COLUMN 博物館こぼれ話

ライオン噴水発見！

担当: 松本 隆史 開示研究系・助教

大学文書館所蔵の大学建物の設計図面を調査していたところ、整形外科・歯科口腔外科教室病室建物の屋上に、ライオンの顔がついた噴水が描かれているのが目に入りました。この建物は、昭和9年に竣工しており、旧歯学臨床研究棟として馬出キャンパスに現存しています。

現在は閉鎖されている屋上に特別に許可をもらい上ってみると、居ました！前号でご紹介した工学部本館のライオン雨樋とはだいぶ表情が異なります。当時、屋上にはベンチが配置され、動物舎があったことも図面から見て取れます。噴水は、建物の正面に左右1つずつ設置されていますが、建物前の道路からは角度的に見えず、すこし不思議なレイアウトでもあります。設計者はどのような意図で、ここにライオン噴水をデザインしたのでしょう？

Series : Research at the Kyushu University Museum

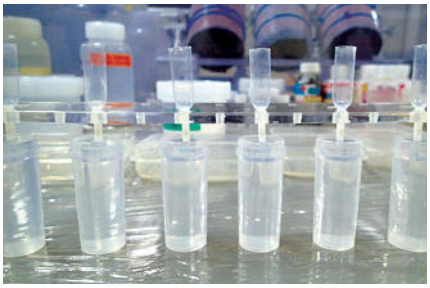
シリーズ・九大博物館での研究の紹介

科学研究費補助金による研究：その12

地球科学的アプローチによる我が国における近世以前の非鉄金属製錬技術の体系化

中西 哲也　分析技術開発系・准教授　専門：鉱床学、鉱山技術史

化学組成分析に用いた蛍光X線分析装置


カラム分離による鉛同位体比分析試料の前処理

鉛同位体比分析に使用したMC-ICP-MS

日本は「資源が無い国である」と良く言われます。しかし、古くは674年の対馬における銀生産に始まり、752年に建立された奈良の大仏には、約500トンの銅が使用され、山口県長登（ながのぼり）銅山をはじめとする国産の銅が使用されました。16世紀半ばには、島根県石見銀山で銀生産の技術革新が行われ、日本全体の銀生産量が増える一因となりました。また、新潟県佐渡金山では、金銀鉱石中の金銀を分離する焼金法が行われ、良質な金を生産しました。

日本における初期の銀生産は、銀を含む鉛鉱石（方鉛鉱）を製錬することで行われてきました。それに対し、石見銀山では、鉛が少なく銀鉱物の多い銀鉱石から銀を効率よく取り出すために、まず鉛を加えて製錬した後、灰吹法による鉛と銀の分離が行われました。石見銀山の銀鉱石の鉛／銀比の分析値約2.4に対し、製錬滓で約50となった事は、製錬の際の鉛の添加を裏付けています。同様な鉛の添加は、新潟県鶴子（つるし）銀山、山形県延沢銀山、谷口銀山、秋田県院内銀山等でも見られ、石見銀山で用いられた技術が伝播した事が伺えます。

また、銀製錬に用いられた鉛（あるいは鉛鉱石）の産地同定のため、西日本地域の主要鉱山の鉱石や製錬滓について、マルチコレクター型質量分析装置（総合地球環境学研究所）による安定鉛同位体比の高精度分析を試みました。その結果、各鉱山のデータは、比較的明瞭に分離し、石見銀山で使用された鉛が、主に石見地域（例えば五十猛（いそたけ）鉱山）の鉛鉱石であり、時期によっては他地域（例えば山口県久喜鉱山）である事が判明しました。

この様に、日本各地の鉱山の鉱石や製錬滓の化学組成分析や安定同位体比分析は、金属生産技術の革新や伝播、原料の産地同定など、文献による記述の科学的な検証や、記録に残っていない新事実の発見に大きく貢献しています。

（基盤研究C（一般）：文化財科学・博物館学　平成25年～27年度）

COLUMN

理学部から救出された歴史的什器（木製家具）が意味するもの

担当：吉田 茂二郎　総合研究博物館長

理学部の移転は平成27年10月の後期開講に向けて行われた。理学部が有する多量の標本類は事前に標本整理とデータベース化を進め、安全に移転をする計画を立ててきたので比較的スムーズであったが、それでも問題点は多かった。一方、歴史的什器（以下、木製家具類）については、移転前の物品調査の資料で概略は把握していたつもりであったが、実物を見ないことには保存すべきか否かの最終判断ができないので、移転と同時進行で調査収集をすることになった。いざ始めてみると、これまでの工学部や農学部とは全く異なる質実剛健な型式の家具類が数多く確認された。

理学部から収集した木製標本戸棚

Series : OIKAKETE

シリーズ・追いかけて

退職記念記事：

私の大学博物館

中牟田 義博
一次資料研究系・准教授
専門：鉱物学

2000年4月に九州大学総合研究博物館が設置されて、すでに16年が経とうとしている。設立時より博物館に在籍しその活動にかかわってきたことになるが、その間、大学博物館について考え、やってきたことについて、「私の大学博物館」として記しておきたいと思う。今後の博物館をどのように作っていかれるかについては、現在のスタッフが自由に選択、決定されていくべきであり、ここに記すことは、私が思い描いた個人的な雑感である。

大学博物館を作ろうという切実な思いは、大学に残されている標本をなんとか残したいという旧地質学教室の先先先代の古生物学講座の教授であった故鳥山隆三先生の思いを、代々引き継ぎ30年以上も持ち続けた末、文科省の方針に乗って、杉岡総長の尽力により、2000年に実現に至ったものである。このことから、地球惑星科学教室（旧地質学教室）は博物館設立に当たり2名の定員を割いて博物館設立に協力し、また博物館事務も理学部に置かれることとなった。

総合研究博物館の理念にも、このことから、内規として、大学に残された標本・資料が移転等で散逸しないよう一元管理すること、また、大学の一部局として、大学の窓口となり、大学での教育・研究を社会に伝え、優秀な学生の確保やその成果の社会への還元ということがあげられた。

総合研究博物館看板かけ（2000/5/30）
前列右より：杉岡総長、湯川館長、後列スタッフ（左より：楠本、中西、松隈、宮崎、中牟田）看板の文字は杉岡総長の揮毫

創設記念式典（2000/5/11）　壇上は杉岡総長

博物館という名前がついているためにこのことを見失いがちになってしまうが、その役割は、市民サービスのために設けられた通常の博物館とは、運営経費の出所を含めて、大きく異なっていると考えられる。

大学博物館の大きな特徴は、大学博物館そのものの組織には7～8名のスタッフと非常に限られた運営経費しかないが、そこに残された標本・資料は膨大であること、また、その周りには2000名程度の専門家集団がいることにある。このことから、「私の大学博物館」は膨大な標本・資料と2000名程度の学芸員が存在する九大全体であり、その博物館を運営するための核となる組織が、部局としての総合研究博物館である。この大きな博物館構想と総合研究博物館のスタッフを中心として標本・資料管理や展示を行うという小さな博物館構想とでずいぶん議論したことが記憶に新しい。大きな博物館構想の名残として、博物館の資料部には、各部局から70名程度の教員に兼任として参加いただいている。展示に関しては、博物館の教員としては裏方に徹し、研究内容を紹介していただく各部局の先生方が中心となることによって、博物館主催の展示に積極的に協力いただけたように思う。博物館業務、教育、研究の両立は難題ではあったが、16年間楽しく過ごせたと思っている。

館内探訪

当時の備品台帳

また、家具類の基礎情報が記載された当時の備品台帳も同時に収集され、理学部創設当時の昭和14～15年の家具類が数多く含まれていることがわかった。理学部の家具類が購入された昭和14～15年は、三井所清典氏（日本建築士会連合会会長、新国立競技場の木質化を進言）の講演（平成28年1月27日九州大学椎木講堂で開催）によれば、第二次世界大戦に関連して昭和10～20年は日本国内では木材統制が行われており、そのような時期に作られた本学理学部の家具群は日本の歴史上からも非常に貴重なものであると言えよう。今回、理学部で収集した多数の家具類について、今後は当時の備品台帳をもとに種類別、年代別、用途別に系統的な分類を行うことで、理学部の家具類の真の希少性・重要性が明らかになってくるであろう。それらが明らかになった暁には、必ず皆さんにお見せする機会を作りたいと考えている。乞う、ご期待。

Personnel Changes

人事往来

移籍の挨拶

　このたび博物館を離れて学内の比較社会文化研究院に所属を移し、地球社会統合学府で専任教員として教育に携わる事になりました。在任中は館内外の皆様に大変お世話になり、誠にありがとうございました。展示活動を通じ研究者として様々な経験を積むことができました。同じ大学内におりますので、今後もこれまで同様、博物館のスタッフと連携し館の資料を用いた最先端研究を行うことで博物館活動に貢献できればと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

比較社会文化研究院　講師
舟橋 京子

着任・退職

平成28年3月31日付けで、
中牟田義博准教授が退職いたしました。(本誌p.7参照)

平成28年2月1日付けで、
舟橋京子助教が比較社会文化研究院・講師に転出いたしました。

特定有期事務職員の松崎康司は、
平成28年3月31日限りで退職いたしました。

専門研究員

永井　リサ　平成27年10月1日～
有馬　　學　平成27年10月7日～

公開展示

- **地球–人と自然　恐竜発掘最前線**
  期間：平成27年11月13日(金)～23日(月)
  場所：箱崎キャンパス旧工学部本館3階301・340・341室
- **JAXA「はやぶさ」計画：小惑星イトカワの謎を探る**
  期間：平成27年11月21日(土)～23日(月)
  場所：箱崎キャンパス旧工学部本館3階第一会議室

公開講演会

- **恐竜発掘最前線**
  期間：平成27年11月21日(土)
  場所：箱崎キャンパス旧工学部本館1階大講義室

Activities of Exhibitions & Conference

展示・講演会関係の活動状況

特別展示

- **そこにあるちいさなせかい －ムシメセン写真展－**
  期間：平成27年10月5日(月)～11月27日(金)
  場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室
- **九州大学教育・研究の最前線 －第14回P＆P研究成果一般公開－**
  期間：平成27年12月1日(火)～12月25日(金)
  場所：箱崎キャンパス旧工学部本館3階 301・340・341室
  主催：九州大学研究戦略会議・九州大学総合研究博物館
- **九州大学歴史的備品再生プロジェクト**
  期間：平成28年1月11日(月)～1月25日(月)

  九州大学歴史的備品再生プロジェクト Ⅱ
  期間：平成28年2月12日(金)～3月末(予定)
  場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室
  主催：九州大学総合研究博物館
  共催：大川インテリア振興センター

特別企画

- **トピックス展 「おしゃれ虫　カタゾウムシ」**
  期間：平成27年10月24日(土)～12月20日(日)
  場所：千葉県立中央博物館　第2企画展示室
  主催：千葉県立中央博物館　共催：九州大学総合研究博物館
- **九州大学総合研究博物館所蔵標本展示「きらめく甲虫」展**
  期間：平成27年12月1日(火)～平成28年1月11日(月)
  場所：福岡県青少年科学館
  主催：福岡県青少年科学館　共催：九州大学総合研究博物館
- **「文字の旅二千年－手書き文字からデジタルフォントまで」**
  第6回スタヂオポンテカリグラフィー作品展
  期間：平成27年12月5日(土)～12月13日(日)
  場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室・5階展望室
  主催：スタヂオポンテ　共催：九州大学総合研究博物館

サテライト巡回展示

- **福岡空港サテライト**
  平成27年10月30日(金)～ 福岡県のクワガタ1・2
- **糸島地区サテライト**
  平成27年10月30日(金)～ 福岡県の蝶7(前原市伊都文化会館)
  平成27年10月30日(金)～ 福岡県の蝶8(糸島市市役所二丈庁舎)

テレビ出演

- **毎日放送**
  情熱大陸「丸山宗利　昆虫学者」
  (丸山宗利助教)
  平成27年10月4日(日)放送

展示協力

- **美Zoo術館(びじゅーつかん)展**
  総合研究博物館蔵剥製標本(キツネ、テン、イタチ、サル)提供
  期間：平成28年2月2日(火)～4月10日(日)　場所：福岡市美術館

学内連携企画

- **図書館展示－標本にみる九州大学の研究－**
  第5弾「九州大学の昆虫標本　part.2」
  期間：平成27年7月9日(木)～平成28年1月13日(水)

  第6弾「九州大学の昆虫標本　part.3」
  期間：平成28年1月13日(水)～平成28年3月末(予定)
  場所：箱崎キャンパス中央図書館2階エントランス常設展示コーナー
- **ウェスト1号館エントランス展示**
  期間：平成28年2月16日(火)より展示開始
  場所：伊都キャンパスウェスト1号館2階エントランスホール

博物館施設一般公開

- **「地方創生～九州地域間・産学官連携サミット」に伴う施設公開**
  期間：平成28年2月13日(土)
  場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室
- **「九大遺産」を巡る博物館ツアー**
  期間：平成28年2月13日(土)
  場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室・
  旧工学部本館4階第二会議室「青山熊治画伯筆壁画」・列品室1

セミナー

- **九大博物館ミュージアムセミナー vol.1**
  「木質家具再生への思い－九州大学歴史的備品再生プロジェクト－」
  横田圭蔵(有限会社ヨコタ・ウッドワーク社長)、
  吉田茂二郎(九州大学総合研究博物館館長)
  期間：平成28年1月15日(金)
  場所：BIZCOLI (ビズコリ／福岡市中央区渡辺通2-1-82電気ビル共創館3F)
- **九大博物館ミュージアムセミナー vol.2**
  「戦後日本の木製家具と家具道具室内史研究の最近の動向」
  新井竜治(家具史家・芝浦工業大学非常勤講師)
  期間：平成28年1月25日(月)
  場所：BIZCOLI (ビズコリ／福岡市中央区渡辺通2-1-82電気ビル共創館3F)

運営委員会

平成27年10月28日(書面回議)
平成27年11月25日(書面回議)
平成27年12月22日(書面回議)
平成28年　2月10日(書面回議)
平成28年　3月　9日(書面回議)

団体見学

平成27年10月15日　工学部土木工学科卒業生
平成27年10月19日　慶應義塾大学
平成27年11月10日　福岡アジア美術館
平成27年12月　8日　山口県立宇部高校
平成28年　2月13日　九州地域間・産学官連携 サミット併催行事
平成28年　2月22日　入部小学校・九州大学非公認サークル CHANCE

編集：松本 隆史　デザイン：古賀 桂子　発行：九州大学総合研究博物館　〒812-8581　福岡市東区箱崎6-10-1　TEL 092-642-4252　HP http://www.museum.kyushu-u.ac.jp
印刷：城島印刷株式会社　〒810-0012　福岡市中央区白金2-9-6　TEL 092-531-7102　FAX 092-524-4411　発行日：平成28年3月31日
© 2016 The Kyushu University Museum